



秋葉信仰と街道

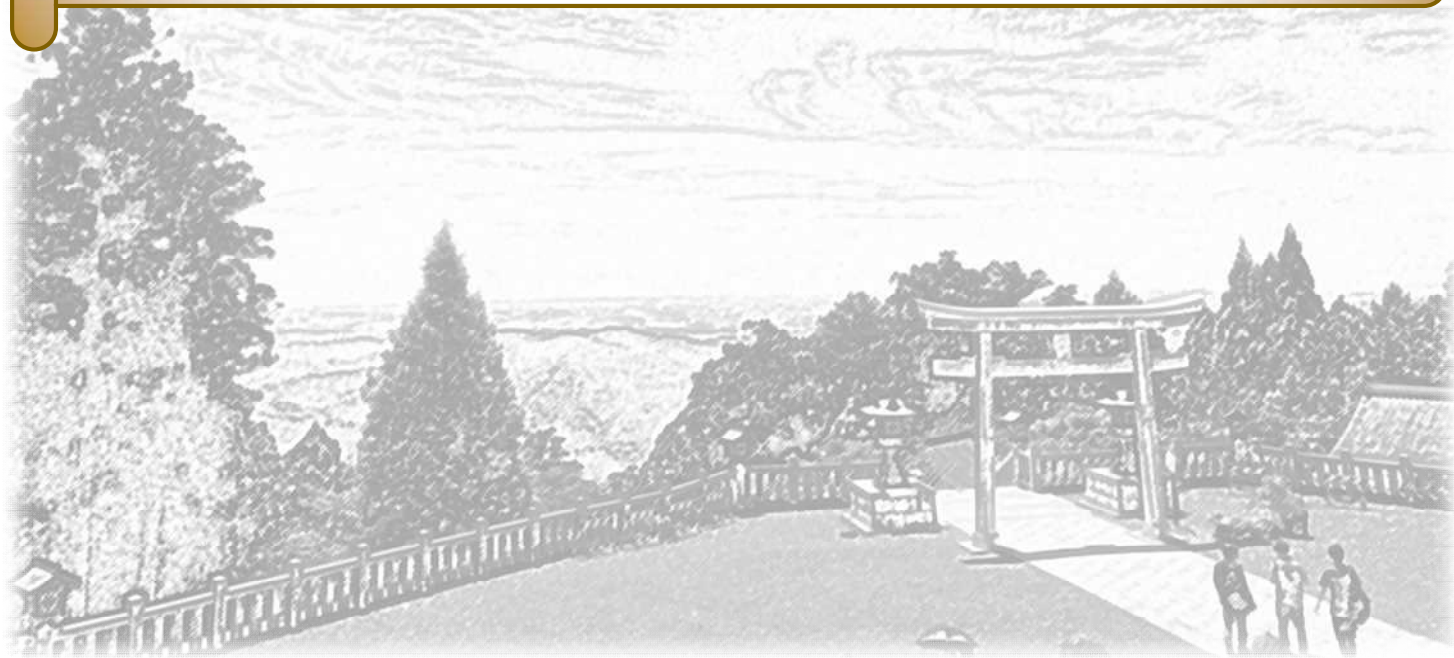
ストーリーの概要

秋葉街道は、人々の祈りが息づく歴史文化の十字路であり、塩の道と呼ばれる信州との南北交易の道でもあった。街道を辿る旅は、多彩な歴史の積み重なりが体感できる。

古来、静岡県の奥地の山々は、神々が宿る霊場であった。天竜川を遡った標高 866mの「秋葉山」もその一つである。「秋葉山」は、戦国の世には武運長久の御利益を求めた武将たちの信仰を集め、平和が訪れた江戸時代には、火防の効力を期待する民衆の信仰を集めた。

江戸を始めとする各地からの参詣者が辿った道は「秋葉街道」と呼ばれ、道沿いや集落の中には、秋葉燈籠が建てられた。現在も火を灯す燈籠は、祈りの姿を今に伝える。

南北を結ぶ道は、塩を始めとした交易を通じて海岸地域と山間地域の人々を結び付けた。遠江北部と奥三河、南信州を繋ぐ道筋に伝わる伝統芸能が持つ共通性は、街道を通じた人々の交流を物語る。



トピック

神が住む山々



遠江国(静岡県西部)の山なみ

- 山々には、神々が宿る。山頂域の寺社は、今も人々の信仰を集める。
- 天竜川を遡った標高約870mの「秋葉山」もその一つである。秋葉山は、明治時代の神仏分離以前は、「秋葉社」と「秋葉寺」が併存した。
- 明治時代の廃仏毀釈により、護神の三尺坊大権現は可睡斎に遷座されたが、今も秋葉神社、秋葉寺、可睡斎では、火ぶせの祭りが毎年行われる。

武運長久と火ぶせの祈り



山林の中を登っていく
秋葉街道

- 「秋葉山」の利益は、古くは武運長久が第一であり、武家の信仰を集めた。秋葉神社には、武田信玄、豊臣秀吉等が奉納した刀も伝わる。
- 太平の世をむかえた江戸時代。「秋葉山」は火ぶせの効力に注目した民衆の信仰を集めた。
- 「秋葉山」を目指して参詣者が辿った道は、「秋葉街道(秋葉道)」と呼ばれるようになった。

秋葉街道と「塩の道」



信濃国(長野県)との境付近に立つ「塩の道」の碑

- 秋葉街道は古くからの道を母体とする。その一つが「塩の道」である。
- 塩の道は、太平洋側と日本海側から信濃へ「塩」とその対価を運んだ南北交易の道である。
- 太平洋側からのルートは、現在の牧之原市相良から御前崎市、菊川市、掛川市、森町、浜松市天竜区水窪を経て南信濃に至る。道沿いには、しおまち塩町(掛川市)やしょうかいざか塩買坂(御前崎市・菊川市)等「塩」に由来する地名も残る。

行交う人 -文化の交流-



西浦の田楽
(浜松市天竜区)

- 秋葉街道(塩の道)は、山間地域の人々を結び付けた。
- 秋葉街道が貫く北遠地域と隣接する奥三河や南信濃は、人々と神が結び付いた生活が営まれてきた。
- 正月行事の田楽や中世芸能を演目に持つ祭礼、猿楽、霜月行事の湯立て神楽(花祭)、盆行事の念仏踊りといった、各地に伝わる民俗芸能には共通性が見られる。

火ぶせの祈りを伝える構成資産

- 県西部の9市町（浜松市、湖西市、磐田市、袋井市、森町、掛川市、菊川市、牧之原市、御前崎市）に所在する 48 件の文化財が構成資産

火ぶせの神

- 「秋葉山」は、古くは山岳修験の霊場であった。明治時代の神仏分離以前は、秋葉大権現を祀る「秋葉社」と聖観音を本尊とする「秋葉寺」が併存し、護神が修験者三尺坊（三尺坊大権現）であった
- 「秋葉寺」は、明治時代の廃仏毀釈で廃寺（明治 13 年（1880）に再興）となり、三尺坊大権現は「可睡斎」に遷座された
- 秋葉神社、秋葉寺、可睡斎では、毎年、火ぶせの祭りが行われる



秋葉山本宮秋葉神社(上社)



秋葉寺



秋葉総本殿可睡斎

構成資産 1 ～秋葉山エリア（浜松市）～



あきはさんほんぐうあきはじんじゃ

①秋葉山本宮秋葉神社

浜松市天竜区春野町領家

- 秋葉信仰の中心地
- 山頂付近に上社（左）、麓に下社（右）がある



あきはじんじゃひぶせのみまつり

②秋葉神社火防祭

浜松市天竜区春野町領家

- 毎年 12 月 15 日、16 日に秋葉神社境内地で行われる
- 火難防除だけでなく、水難や諸厄諸病も祓いやる祈りをこめた祭り



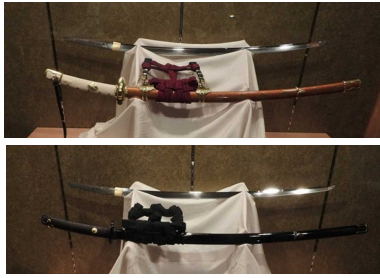
あきはじんじゃしんもん ずいしんもん

③秋葉神社神門(隨身門)

浜松市天竜区春野町領家

《市指定有形文化財》

- 参道の終点にあるスギの巨木に囲まれた門
- 信州立川流による文化 9 年（1812）の建立



めいやすなわ めいひろつぐ めいらいくにみつ
④銘安縄(上)、銘弘次(下)、銘来国光

《国重要文化財》

浜松市天竜区春野町領家

- 秋葉神社に奉納された鎌倉時代の名刀。上社社殿に展示される
- 武田信玄、豊臣秀吉、加藤清正等が奉納した刀も伝わる

※通常非公開



しゅうようじ
⑤秋葉寺

浜松市天竜区春野町領家

- 江戸時代まで秋葉神社とともに信仰の中心であり、明治13年(1880)に再興された



しゅうようじ ひまつり
⑥秋葉寺火祭り 浜松市天竜区春野町領家

- 毎年12月15日、16日に秋葉寺境内地で行われる火防鎮護を祈る祭り



さかしたしゆく さんどう
⑦坂下宿のまちなみと参道 浜松市天竜区春野町領家

- 秋葉山上社の裾野に位置する秋葉山参詣者の宿場町
- 九里橋を渡り集落を過ぎると、秋葉山頂までは森林の中の登山道となり、路傍には丁石が建ち、接待茶屋の跡等も残る



わかみ
⑧若身のまちなみ 浜松市天竜区春野町堀之内

- かつての秋葉山参詣者の宿場町。集落はその面影を残す



わだのや
⑨和田ノ谷のまちなみ 浜松市天竜区春野町領家

- かつての秋葉山参詣者の宿場町。集落はその面影を残す



いぬいじょうあと
⑩犬居城跡 浜松市天竜区春野町堀之内

《県指定史跡》

- 戦国時代、北遠に勢力を張った天野氏の居城跡
- 秋葉山参詣者が通った「秋葉街道」の一部は、「塩の道」と重なる
- 徳川家康は「塩の道」を辿り兵を進め、北遠地域を攻略した

構成資産 2～可睡斎・袋井エリア（袋井市）～



秋葉総本殿可睡斎



可睡斎秋葉の火まつり

かすいさい
⑪可睡斎 袋井市久能

- 明治時代に、秋葉山に祀られていた三尺坊大権現が遷座された
- 火ぶせの大祭が毎年12月15日、16日に行われている
- 寺院内の護国塔は県指定有形文化財、瑞龍閣・東司は国登録有形文化財

建物内の拝観料 700円(8:00～16:30)



瑞龍閣



護国塔



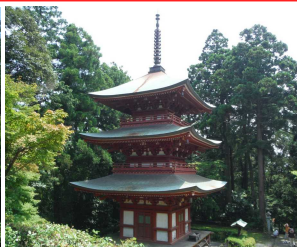
きゅうとうかいどうふくろいしゆく
⑫旧東海道袋井宿 袋井市袋井

- 旧東海道の宿場町。東海道五十三次の東西どちらから数えても27番目のまん中の宿
- 旧宿場町内には、秋葉燈籠が残る
- 袋井銘菓の「秋葉纏(最中)」は、秋葉山に由来



そんえいじ はったさん
⑬尊永寺(法多山) 袋井市豊沢

- 秋葉山参詣者が、「次いで参り(両参り)」に参詣
- 仁王門は国重要文化財、毎年1月7日に行われる「法多山の田遊び」は国重要無形民俗文化財



ゆさんじ
⑭油山寺 袋井市村松

- 秋葉山参詣者が、「次いで参り(両参り)」に参詣
- 三重塔や山門、本堂内厨子は国重要文化財、書院・方丈・本堂・御霊杉は県指定文化財

建物内の拝観料 300円(9:00～16:30)



ながみぞ とうろう
⑮長溝の燈籠 袋井市長溝

- 宿場町や街道沿いには、火ぶせの効力も期待して秋葉燈籠と呼ばれる常夜灯が建立された
- 長溝の燈籠は、セメントモルタルを利用した角柱型の燈籠

「巡礼の道」と「塩の道」

- 火ぶせの効力を求め、各地からの参拝者が秋葉山を目指した道は「秋葉街道」や「秋葉道」と呼ばれるようになった
- 広い信仰圏を持つ秋葉山。東西南北、様々なルートで人々は「秋葉山」を目指した。複数ある秋葉街道のうち、主な4ルートを紹介する



西ルート

旧東海道御油宿(愛知県)
→鳳来寺(愛知県)
→熊(浜松市天竜区)
→秋葉山

北ルート

南信濃
→青崩峠
→水窪(浜松市天竜区)
→秋葉山

南ルート

旧東海道浜松宿
→光明山(浜松市天竜区)
→秋葉山
※途中、気賀宿からの参拝者も合流

東ルート

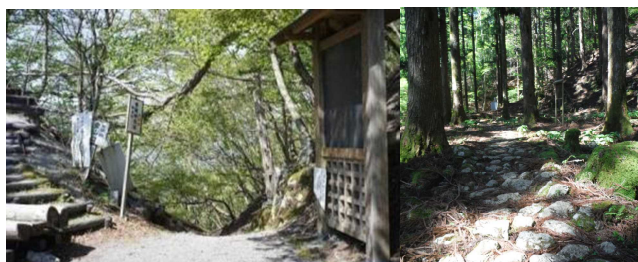
旧東海道掛川宿
→森町
→秋葉山
※相良湊を起点とする「塩の道」とも重複

- 江戸時代に人々が「秋葉山」に詣でる以前から、遠江には各地をつなぐ道があった。その一つ「塩の道」は、一部が秋葉街道と重なる
- 起点となる相良湊を始め、道沿いには塩の道を示す石碑等が建てられ、「塩」の取引に由来する地名も残る



新野原(御前崎市)の「塩の道」道標

構成資産3～街道北部エリア(浜松市)～

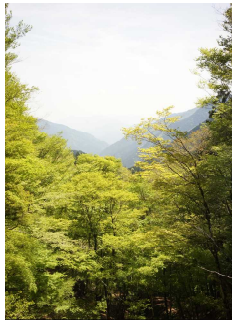


青崩峠から北を望む

青崩峠付近の石畳

あきはいどう なんしん みさくぼ あきはさん ⑩秋葉街道(南信-水窪-秋葉山ルート)

- 南信濃から「秋葉山」に至る山岳ルート



青崩峠からみた遠江国



足神神社

あおくずれとうげ

⑱ 青崩峠 浜松市天竜区水窪町奥領家

◀県指定史跡▶

- 遠江国と信濃国の国境となる峠
- 武田軍の一部は、遠江侵攻の際に青崩峠を越えたとも言われる
- 峠の近くには、しっぺい太郎の墓や、脚の病治癒の靈験があると言われる足神神社がある



みさくぼ しゅうらく

⑳ 水窪の集落 浜松市天竜区水窪町

- かつての「秋葉山」参詣者の宿場町
- 川沿いの低地から、山腹にかけて集落が広がる



にしど

㉑ 西渡のまちなみ 浜松市天竜区佐久間町

- かつての「秋葉山」参詣者の宿場町
- 天竜川を遡り運ばれた荷物は、ここで船から降ろされ、陸路で水窪へと運ばれた



山住神社の狛犬

やまずみじんじゃ

㉒ 山住神社 浜松市天竜区水窪町山住

- 塩の道は、戦国武将も行軍に利用した
- 山住神社は、敗走した家康が訪れたという伝承を持ち、遠江の山犬信仰の中心的な神社
- 境内の2本のスギは県指定天然記念物



にしうれ でんがく

㉓ 西浦の田楽 浜松市天竜区水窪町奥領家西浦

◀国重要無形民俗文化財▶

- 秋葉街道・塩の道は、山間地域の人々を結び付けた
- 毎年旧暦1月 18 日から 19 日にかけて、夜を徹して行われる
- 南信濃・遠山の霜月祭との関連性を持つ



かわいはな まい

㉔ 川合花の舞 浜松市天竜区佐久間町川合

◀県指定無形民俗文化財▶

- 秋葉街道・塩の道は、山間地域の人々を結び付けた
- 毎年 10 月下旬に行われる湯立神楽
- 奥三河の花祭(霜月神楽)が、遠江側に伝わったもの



みさくぼ

㉕ 水窪じゃがた

浜松市天竜区水窪町

- 水窪に伝わるジャガイモの在来種



しよく

㉖ つぶ食

浜松市天竜区水窪町ほか

- かつて主食であったアワ、ヒエ、キビ等の雑穀料理
- 伝統食として今でも北遠地区に残る

構成資産 4 ～街道西部エリア（浜松市）～

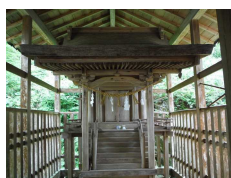


あきはかいどう ごゆしゆく くんま あきはさん
⑲秋葉街道(御油宿－熊－秋葉山ルート)

- 旧東海道浜松宿から、「秋葉山」に至るルート
- 熊のまちなみ(左写真)は、往時の面影を残す



おくやまはんそうぼう ほうこうじ
⑳奥山半僧坊(方広寺) 浜松市浜名区引佐町奥山



七尊菩薩堂

- 秋葉山参詣者が「次いで参り(両参り)」に参詣
- 七尊菩薩堂は現存する県内最古の木造建造物(国重要文化財)、本堂等 22 棟は国登録有形文化財

時9:00～16:00 料:500円(小・中学生200円)

構成資産 5 ～街道南部エリア（浜松市）～



あきはかいどう はまつしゆく あきはさん
㉑秋葉街道(浜松宿－秋葉山ルート)

- 旧東海道浜松宿から、「秋葉山」に至るルート
- かつては起点を示す一の鳥居が現在の浜松市中央区田町にあった
かつての一の鳥居(左)、現在の様子(右)



こまつあきはじんじやに とりい
㉒小松秋葉神社二の鳥居 浜松市浜名区小松

◀市指定有形文化財▶

- 旧東海道浜松宿からの秋葉街道沿いにある石造の鳥居
- 江戸時代の三河国岡崎の石工の作



いちのちょう とうろう
㉓市野町の燈籠
 浜松市中央区市野町

- 市野町の燈籠は、宝暦10年(1760)の銘を持つ最古の秋葉燈籠



◀市指定有形文化財▶

かみじましんでん さやどう
㉔上島新田の鞘堂
 浜松市浜名区上島

- 上島新田の鞘堂は、特に精緻で美しい彫刻をもつ



こうみょうじ
㉕光明寺
 浜松市天竜区山東

- 水防の御利益を求め、秋葉山参詣者が「次いで参り(両参り)」に参詣



あきは まつ
㉖秋葉さんのお祭り
 浜松市浜名区・湖西市

- 市内には、秋葉信仰を物語る祭りが伝わる

構成資産 6 ～街道東部エリア 1 (掛川市・森町) ～



あきはかいどう かがわしゅく もり あきはさん
③秋葉街道 (掛川宿ー森ー秋葉山ルート)

- 旧東海道掛川宿から、「秋葉山」に至るルート
- 森町の本町や城下、三倉は往時の面影を残す

秋葉街道と城下(森町)のまちなみ



しおまち
③塩町 掛川市塩町

- 古くから遠江の海岸部と信濃を結んでいた「塩の道」に由来



ほそや とうろう
③細谷の燈籠
 掛川市細谷

- 細谷の燈籠は、セメントモルタルを利用した社型



《町指定有形文化財》
 しろした さやどう
③城下の鞘堂 森町城下

- 天保4年(1834)に建てられた鞘堂
- 燈籠は、徳川家康の御用鋳物師である森町の山田七郎左衛門家とともに活躍した岡野家が鋳造した青銅製



みくら
③三倉のまちなみ 森町三倉

- かつての秋葉山参詣者の宿場町
- 三倉八幡神社本殿は県指定有形文化財
- 三倉には家康の敗走伝承を元にした戦国夢街道(ハイキングコース)がある

とおとうみちいき あきはとうろう さやどう
③遠江地域の秋葉燈籠(燈籠)・鞘堂 各市町

- 宿場町や街道沿いには、火ぶせの効力も期待して秋葉燈籠と呼ばれる常夜灯が建立された
- 遠江地域には、多様な燈籠・鞘堂が 1000 基ほどあり、様々なバリエーションが見られる
- 秋葉燈籠は、鞘堂(龍燈)と呼ばれる木造建物を伴うことも多い

構成資産 7 ～街道東部エリア 1 (牧之原市・菊川市・御前崎市) ～



しお みちきてん
③塩の道起点 牧之原市波津

- 秋葉街道は、古くから遠江の海岸部と信濃を結んでいた「塩の道」と一部が重複する
- 塩の道の起点である旧相良湊には、秋葉燈籠が残り、塩の道起点の碑が建つ



おおえ とうろう
④⑩大江の燈籠

牧之原市大江

- 大江の燈籠は、大型の竿（燈籠の柱状部分）が特徴的



かとう とうろう
④⑪河東の燈籠

菊川市河東

- 河東の燈籠は、セメントモルタルを利用した社型



しょうかいざか
④⑫塩買坂 菊川市高橋・御前崎市新野

- 古くから遠江の海岸部と信濃を結んでいた「塩の道」に由来
- 菊川市内では、「塩の道羊羹」も販売される
- 御前崎市内には、戦国時代に武田軍が高天神城を攻める際に陣を張った塩買坂陣場跡がある

構成資産 8～磐田エリア（磐田市）～



きゅうとうかいどう みつけしゆく
④⑬旧東海道見付宿 磐田市見付

- 旧東海道の宿場町
- 旧宿場町内には、秋葉燈籠が残る



やなひめじんじゃ
④⑭矢奈比賣神社
みつけてんじん
（見付天神）
磐田市見付

- 秋葉山参詣者が、「次いで参り(両参り)」に参詣



みつけ とうろう
④⑮見付の燈籠 磐田市見付

- 見付の燈籠は、数少ない青銅製の燈籠



たかぎ さやどう
④⑯高木の鞘堂 磐田市高木

- 高木の鞘堂は、精緻な彫刻が美しい鞘堂

構成資産 9～新居エリア（湖西市）～



きゅうとうかいどう あらいしゆく
④⑰旧東海道新居宿 湖西市新居町新居

- 旧東海道の宿場町
- 旧宿場町内には、秋葉燈籠が残る
- 新居関跡は国指定の特別史跡



ふなまち さやどう
④⑱船町の鞘堂 湖西市新居町新居

- 宿場町や街道沿いには、火ぶせの効力も期待して秋葉燈籠と呼ばれる常夜灯が建立された
- 秋葉燈籠には、精緻な彫刻が施された鞘堂（龍燈）と呼ばれる木造建物を伴うことも多い
- 船町の鞘堂は、県西部で最大級の大きさを誇る鞘堂

「秋葉信仰と街道」のストーリー

○神が住む山々

古来、静岡県^{しずおか}の奥地の山々には、神々が宿る。現在も、山頂域に社殿や堂宇を構える寺社が、人々の信仰を集めている。天竜川を遡った標高866m「秋葉山」もその一つである。

「火防（火伏）の神」として知られる「秋葉山」であるが、古くは山岳修験の霊場であり、明治時代の神仏分離以前は、秋葉大権現を祀る「秋葉社」と聖観音を本尊とする「秋葉寺」が併存し、護神が修験者三尺坊（三尺坊大権現）であった。「秋葉寺」は明治時代の廃仏毀釈で廃寺（その後明治13年に再興）となり、三尺坊大権現は「可睡斎」に遷座された。遷座以降、「可睡斎」でも、火防の大祭（火まつり）が毎年行われている。現在は、火之迦具土大神を祀る「秋葉神社」と「秋葉寺」に分かれ、「秋葉神社」は、山頂の上社と山裾の下社があり、「秋葉寺」にも山裾に里坊である千光寺がある。

○武運長久と火防の祈り

秋葉大権現の利益は、古くは武運長久が第一であった。そのため、古来、武家の信仰を集めた。現在、秋葉神社が所蔵する太刀の銘安繩、銘弘次、銘来国光は、鎌倉時代のものであり、戦国時代の武田信玄、豊臣秀吉、加藤清正等が奉納した刀も伝わる。

江戸時代、太平の世をむかえ、町屋等で大火による大規模な損害が生じるようになると、「秋葉山」は火防の効力に注目した民衆の信仰を集めるようになり、各地から参拝者が秋葉山を目指した。

東からは、東海道掛川宿から現在の森町を通るルート、西からは東海道御油宿から鳳来寺（ともに愛知県）、熊（浜松市天竜区）を通るルート、南からは東海道浜松宿から小松秋葉神社二の鳥居（浜松市浜名区）、光明山（浜松市天竜区）を通るルート、さらには北からは南信州を通り青崩峠（浜松市天竜区）を越えて水窪（浜松市天竜区）を経て秋葉山に至る道等を辿って、人々が秋葉山を訪れた。

これらの道は、「秋葉街道」や「秋葉道」と呼ばれるようになった。宿場や街道沿いには、火防の効力も期待して秋葉燈籠（灯籠）と呼ばれる常夜灯が建立され灯明が点された。

特に東海道の袋井宿、見付宿、新居宿などでは、江戸末期から昭和にかけて多数の秋葉燈籠が建立され、現在も旧宿場町内に多く残されている。

○秋葉街道と「塩の道」

街道沿いや集落の中に建てられた秋葉燈籠は、様々なバリエーションを持つ。

最も古いものは、浜松市中央区市野町の燈籠で江戸時代の宝暦10年（1760年）の銘を持つ。磐田市見付の燈籠は数少ない青銅製である。牧之原市大江のように竿と呼ばれる柱部が大型化したものや、袋井市長溝・菊川市河東・掛川市細谷のようにセメントモルタルを利用して角柱型や社殿風の形状をした燈籠もある。

また、秋葉燈籠には、精緻な彫刻が施された鞘堂（龍燈）と呼ばれる燈籠を覆う建物を伴うことも多い。森町城下の鞘堂は天保4年（1834年）と最も古く、湖西市新居町の船町にある鞘堂は最大級の大きさを誇り、浜松市浜名区上島新田や、磐田市高木の鞘堂は特に彫刻が美しい。

秋葉燈籠の中には、今なお、地元で灯りが点されているものがあり、燈籠への幟立てや新年のお札をいただく代参が毎年続けられている地区も多い。浜松市浜名区や湖西市新居町などの一部地域が行ってきた、「秋葉さんの火祭り」という特別な祭りは、生活の中に根付いた秋葉信仰を今に伝えている。

火防の効力を求め、秋葉神社や秋葉大権現は各地に勧請された。東京の秋葉原も秋葉大権現に由来する地名である。

秋葉街道は古くからの道を母体とする。江戸時代に人々が「秋葉山」に詣でる以前から、遠江の山間地には各地をつなぐ道があり、その一つが、「塩の道」である。

塩の道は、太平洋側と日本海側から現在の長野県へ、「塩」とその対価を運んだ南北交易の往還道であり、太平洋側からのルートは、現在の牧之原市相良から御前崎市、菊川市、掛川市、森町、浜松市天竜区水窪を経て塩尻（長野県）に至る道である。

起点となる相良湊を始め、道沿いには塩の道を示す石碑等が建てられ、塩町（掛川市）や塩買坂（菊川市、御前崎市）など「塩」の取引に由来する地名も残る。

この他、水窪や西渡（浜松市天竜区）のように、行き交う人々、さらには山間の寺院を巡る修験者の宿場となった集落もあり、江戸時代には、秋葉山への参詣者の増加で、さらに栄えた地域もある。

森町本町や城下、三倉、浜松市天竜区春野町の和田ノ谷、若身等のまちなみは、秋葉山参詣者の宿場町の面影が残る。特に、下社から上社に向う途上にある坂下宿は、往時の面影が強い。

○行き交う物と人、神仏と人の交流

塩の道は、「塩」だけではなく、様々な文物や人々が行き交った。

戦国武将は、行軍にもこの道を利用した。特に知られるのは、元亀3年(1572)、上洛を目指した武田信玄である。このとき、武田軍の一部は青崩峠を越え、徳川家康が治める遠江に攻め入り、三方原で徳川家康を打ち破る。世に言う「三方ヶ原の戦い」である。その後、長篠の合戦を機に武田方の勢力が衰えると、家康は塩の道を辿って兵をすすめ、武田方の天野氏の居城である犬居城を始めとする北遠地域を攻略。

なお、森町三倉や山住神社には、家康の敗走伝承が残る。山住神社は、山犬(オオカミ)信仰でも知られ、狛犬は山犬の姿である。山犬は、動物にまつわる禍を遠ざけると言われ、焼畑農耕が行われた山間地での信仰が厚い。

信州駒ヶ根のヤマイヌである早太郎(しっぺい太郎)は、遠江の見付(磐田市)まで出向き悪霊を退治するが、帰路に命を落とすという伝説が残る。秋葉街道を通じた南北交流を背景とした物語である。

山住神社の麓、水窪町や佐久間町では、昭和30年頃まで焼畑農耕が行われていた。現在も、伝統的な作物栽培は続けられ、「水窪じゃがた」と呼ばれるジャガイモや粟や稗等の雑穀を利用した「つぶ食」等は、山間地域の食文化の一端を今に伝えるものである。

秋葉街道は参詣者だけではなく、山間地域の人々を結びつけるネットワークでもあり、国境を越えた奥三河・遠州・南信州の文化の交流をもたらした。

秋葉街道が縦横に貫く北遠地域と隣接する奥三河や南信州には、正月行事の田楽を始め、猿楽、田遊びといった中世芸能を演目に持つ祭礼、霜月行事の湯立て神楽(花祭)、盆行事の念仏踊りといった各地に伝わる民俗芸能に共通性が見られる。

この地域では人々と神とが結びついた生活が営まれ、また神仏習合の思想も色濃く感じられる。「西浦の田楽」や「川合花の舞」はその代表例であるが、これらはそれぞれ南信州・遠山の霜月祭りや奥三河の花祭りとの関連性が強い。

○秋葉山への誘い

各地から参拝者が秋葉山を目指すようになった江戸時代には、秋葉山参詣の旅を著した「道中記」が多く出版され、絵図も描かれた。十返舎一九による『秋葉山・鳳来寺一九紀行』や、十返舎一九の東海道上藤栗毛を模倣した『秋葉街道似多栗毛』、参詣の道筋を示した『秋葉山参詣道法図』、歌川広重の「東海道五十三次」等の浮世絵にも秋葉山が描かれ、更に多くの人々を秋葉山参詣に誘った。『東海道名所図会』では「蟻の如く道に集い」と表現されるほど多くの参詣者が秋葉山に登っていた様子が記され、街道の宿場町の賑わいが想像される。明治以降には紀行文や日記にも記され、種田山頭火が参詣の途中で読んだ句は、句碑となり、その足跡をたどることができる。これらの紀行文や記録は現代においても古道を辿る人々のガイドとなっている。

火防の御利益を求めての参詣の目的地は秋葉山であるが、旅の行き帰りには他の御利益も求め「ついで参り(両参り)」と称して街道沿いの各所にある聖地を巡礼した。江戸時代に人気のあった県内の参詣先は、水防の御利益を得られた「光明寺」であるが、「奥山半僧坊(方広寺)」や「見付天神」「法多山尊永寺」「油山寺」などの社寺、秋葉山三尺坊と並び「遠州の七天狗」などと称される天狗信仰にまつわる修験の聖地も巡礼の対象とされた。明治以降には、これら社寺に加えて各地の名所・旧跡等も組みこまれるようになった。

○辿る道

秋葉山には今なお火防の効力を求め、人々が訪れる。秋葉街道や塩の道は、近代化により姿を変えた箇所もあるが、古くからの姿を留める箇所も多く残る。

古の面影を残す宿場町を発ち、街道沿いの秋葉灯籠に燈火の灯るまちなみを過ぎ、昔からかわらぬスギ林の中の尾根筋の道を通り、巨木に囲まれた山門をくぐった先にある秋葉神社上社を目指す旅路は、信州を目指した塩の運搬者、山を巡った修験者、覇を競った武将、村を行交う人々、火防を祈る参詣者の息吹を感じることができるだろう。

しずおか遺産

「秋葉信仰と街道」

代表連絡先

担当 浜松市市民部文化財課

電話 053-457-2466

E-mail bunkazai@city.hamamatsu.shizuoka.jp

住所 〒430-8652 浜松市中央区元城町103番地の2